

非雪上型スキー実習に関する成果と課題

谷本英彰[†]・正見こずえ^{††}・露口亮太^{††}
信江彩加^{†††}・嶋田愛^{†††}

Outcomes and Issues of Non-snow Ski training Program

TANIMOTO Hideaki, MASAMI Kozue, TSUYUGUCHI Ryota
NOBUE Ayaka, SHIMADA Ai

概要

本研究では、大学体育施設内に体育用具等を利用して作成した簡易的なスキーコースを使用した非雪上型スキー実習の授業実践に対する受講生の満足度を調査し、本授業の効果および課題を検討した。受講生が自由記述形式で記入した授業に対する所感を分析した結果、本授業実践はスキーに関する基礎的な知識の獲得や深化およびスキーに対する興味・関心に寄与する可能性が示唆された。一方で雪上型スキー実習にて獲得される汎用的能力の醸成が困難であること、スキーの技術習得に対する不安感を与える可能性があることが課題として挙げられたことから、本授業を雪上型スキー実習の事前学習として位置付けて実施することで、それらの課題解決が望めるとともに、従来の雪上型スキー実習における学修効果をさらに高めることができるといえる。

キーワード：ハイブリッド授業，学修成果，野外活動

†大阪産業大学 スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 講師
††大阪産業大学 スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 准教授
†††森ノ宮医療大学 医療技術学部 助教
††††大阪産業大学 スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 契約助手

草稿提出日 3月14日

最終原稿提出日 3月18日

目 的

スキーは、自らの意思で、自由に滑るという運動を楽しむことができ、自然とふれあい、仲間との交流などを体験できる文化である。また、大学体育授業の1つとして取り上げられる機会のあるスポーツであり、新井ほか(2010)の実態調査によれば、回答を得ることができた491の高等教育機関のうち194機関(39.5%)がスキーまたはスノーボード実習を実施している。

スキー実習には、スキーの知識や技能の向上はもちろんのこと、それ以外にも人間的成長を促す効果がある。例えば、中澤ほか(2014)は大学体育授業の一環として実施されるスキー実習の受講生を対象に実習前後における社会的スキルの向上について検討した結果、コミュニケーションスキルや問題解決スキルが向上したことを報告している。また、松本ほか(2016)は、女子大学生を対象にボディシステムを用いたスキー指導を実施した結果、社会的スキルの中の問題解決スキルが向上したことを報告している。さらに松尾ほか(2016)はスキー実習によって経済産業省が提唱する社会人基礎力36項目のうち26項目に関わる能力を向上させるができたことを報告している。

このようにスキー実習にはスキーの知識や技能のみならず、汎用的な能力を向上させる成果を期待することができ、人間形成に有益に関わっている。しかし、2019年末ごろから世界中で猛威をふるい始めた新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年度は多くの大学がオンライン授業などの非対面方式での授業実施を余儀なくされ、本学においては本実践で取り上げたスキー実習は、集団での移動および宿泊を伴うため、感染拡大防止の観点から中止せざるを得なくなった。2021年に入り、状況は僅かながら落ち着ついたため、部分的に対面方式やハイブリッド方式の授業が実施されるようになったが、新型コロナウイルスの新たな変異株により、宿泊を伴う実習や集団での長距離移動を伴う活動の実施を再び断念せざるを得なくなった。

このような状況を鑑みて、宿泊や長距離移動を伴わない方式でスキー実習での学びや上述したような汎用的技能の向上を促すようなプログラムを考案する必要性が生じた。そこで、集団での宿泊や長距離移動を伴わないようにし、大学内にて雪上での実習を可能な限り再現することで、従来のスキー実習で得られる学びや成果が部分的にでも得られる可能性があるのではないかと考えた。学生の非雪上型スキー実習への満足度を調査し、その授業の効果および課題を検討することとした。

方 法

1. 対象者

本学スポーツ健康学部で開講されている専門教育科目の1つである「スキー実習」を履修登録した学生は58名(男子44名, 女子14名; 3年生57名, 4年生1名)であった。そのうち対面方式の授業に参加した学生49名(男子38名, 女子11名; 3年生48名, 4年生1名)オンライン方式の授業に参加した学生は5名(男子2名, 女子3名), 欠席者は4名であった。

2. 授業概要

本科目は, 学科選択必修科目であり, クロスカントリースキーおよびアルペンスキーを実施し, スキー型運動の構造的理解および実践的理解を深め, 運動・スポーツ指導者として必要な科学的根拠に基づく知識とスキルを身につけるとともに, スキーの歴史や特性, スキーの安全教育について理解することを目的とした内容で構成されている。本稿で取り扱う授業は, この科目の一部であり, アルペンスキーの特性, アルペンスキーに関わる技能の構造的理解および実践的理解に関する内容であった。本授業は4名の教員と1名のアシスタントで運営した。

授業は, 1回あたりの受講人数を制限するために受講生を2つのグループに分け, 各グループの受講時間帯をずらして実施した。また, 新型コロナウイルス感染拡大の影響により対面方式の授業を受講できない者もいると想定し, 対面方式とオンライン方式を同時に実施するハイブリッド方式で実施した。

対面方式にて参加した学生に対しては, 大学の体育施設内に体育用具等を利用して作成した簡易的なスキーコースを使用して授業を実施した。

1) 対面方式の授業内容

上述した本科目の目的および本授業の主旨に沿って, 「スキー用具」「スキーブーツの着脱」「スキーブーツでの歩行」「アルペンスキーの着脱およびスキーを使った準備運動」および「アルペンスキーでの歩行および基本的な滑走方法」についての解説(インストラクション)と実践(運動学習)を実施した。また, 授業目標を達成するために本授業を担当した4名の教員および1名のアシスタントが各学習内容でそれぞれの専門性等に応じてMain Teacher(学習集団全体を把握しながら授業を進める教員)またはSub Teacher(授業目標が達成されるようにサポートする教員)としての役割を担った(表1)。本授業で取り扱う各種技能に関わる実践(運動学習)場面においては, 学内の体育施設に設置した簡

表1 授業の流れ

段階	時間(分)	学習内容	受講生の学習活動		教師の指導・留意点
			対面方式	オンライン方式	
導入	5	本時の課題の設定	本時の学習課題を理解するとともに授業の見通しを持つ。		<p>[MT]・授業の概要および学習課題について解説し、授業の見通しを持たせる。</p> <p>[ST]・MTの解説補助および受講生に対する個別指導を行うことで、受講生が授業の見通しを持たせる。</p> <p>・オンラインで参加する受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p>
展開	10	スキーの用具	スキーウェア、グローブ、ヘルメット、ストックなどスキー用具の特性について理解する。		<p>[MT]・各用具の使用法(意義)等を具体的な事例を用いながら解説する。</p> <p>[ST]・MTの解説補助および受講生に対する個別指導を行うことで、受講生が授業の見通しを持たせる。</p> <p>・オンラインで参加する受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p>
	15	スキーブーツの着脱	スキーブーツの着脱方法と着脱ポイントの理解するとともに、それらを実践する。	スキーブーツの着脱方法と着脱ポイントの理解するとともに、それらを解説する。	<p>[MT]・スキーブーツの着脱についての解説および示範を行い、実践的理解を促すようにする。</p> <p>[ST]・受講生のスキーブーツ着脱の実践状況を確認しながら個別指導を行う。</p> <p>・オンライン受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p> <p>・オンライン受講生に、スキーブーツの着脱に関わる内容を解説(口頭発表)するよう指示する。</p>
	15	スキーでの歩行	平地、登り坂、下り坂での歩行方法を理解するとともに、それらを実践する。	平地、登り坂、下り坂での歩行方法を理解するとともに、それらを解説する。	<p>[MT]・スキーブーツでの歩行時の足のつき方について解説および示範を行い、実践的理解を促すようにする。</p> <p>[ST]・スキーコースの各所で受講生一人一人の歩行の様子を見取りながら、個別指導する。</p> <p>・オンライン受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p> <p>・オンライン受講生に、スキーブーツの歩行に関わる内容を解説(口頭発表)するよう指示する。</p>
	10	アルペンスキーの着脱	スキー板の着脱方法を理解するとともに、それらを実践する。	スキー板の着脱方法を理解するとともに、それらを解説する。	<p>[MT]・スキー板の着脱方法について解説および示範を行い、実践的理解を促すようにする。</p> <p>[ST]・受講生のスキー板の実践状況を確認しながら個別指導を行う。</p> <p>・オンライン受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p> <p>・オンライン受講生に、スキーの着脱に関わる内容を解説(口頭発表)するよう指示する。</p>
	15	スキーを使った準備運動	スキーやストックなどを利用した準備運動の方法を理解するとともに、それらを実践する。	スキーやストックなどを利用した準備運動の方法を理解するとともに、それらを解説する。	<p>[MT]・スキーやストックなどを利用した準備運動について解説および示範を行い、実践的理解を促すようにする。</p> <p>[ST]・受講生の実践状況を確認しながら個別指導を行う。</p> <p>・オンライン受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p> <p>・オンライン受講生に、準備運動に関わる内容を解説(口頭発表)するよう指示する。</p>
	15	アルペンでの基本的な滑走方法	平地、登り坂、下り坂での歩行方法および基本的な滑走方法としてのブルークについて理解するとともに、それらを実践する。	平地、登り坂、下り坂での歩行方法および基本的な滑走方法としてのブルークについて理解するとともに、それらを解説する。	<p>[MT]・アルペンスキーでの歩行と滑走方法について解説および示範を行い、実践的理解を促すようにする。</p> <p>[ST]・スキーコースの各所で受講生一人一人の歩行の様子を見取りながら、個別指導する。</p> <p>・オンライン受講生がMTの解説を視聴しやすいようにカメラを操作する。</p> <p>・オンライン受講生に、アルペンスキーでの歩行と滑走方法に関わる内容を解説(口頭発表)するよう指示する。</p>
終結	5	本時の課題・内容の整理	本時の学習課題や学習内容をふりかえる。		<p>[MT]・学習課題、授業の概要について概説し、本時の学習内容についての理解を促す。</p> <p>[ST]・MTの解説補助および受講生に対する個別指導を行うことで、本時の課題や学習内容についての理解を促す。</p>

MT : Main Teacher (学習集団全体を把握しながら授業を進める教員)
 ST : Sub Teacher (授業目標が達成されるようにサポートをする教員)

易的なスキーコースを使用して授業を実施した。このスキーコースは、すべて器械運動の授業や体操競技部の練習で使用される器具である。このコースは主に、スキーブーツおよびスキー板を使った平面歩行の練習（写真2）、スキーブーツおよびスキー板を使った斜面歩行の練習（写真3～4）、斜面の横歩きおよびプルークの練習（写真5～7）を意図して構成された。運動学習場面における活動の効率性を考慮し、サーキット型のコースとして設計するとともに、体育施設のフロアやスキー板へ与える衝撃等を最小限に抑えるためコース上はすべて器械運動用のマットで覆った。また、プルークでの滑走終了時にスキー板のトップがマットのくぼみにはまり、転倒する危険性があったため、そのくぼみに毛布等を緩衝材として設置するなど、安全面にも考慮した（写真7）。



写真1 簡易的なスキーコースの全体像



写真2 スキーブーツおよびスキー板の着脱場
ならびに平面歩行練習場



写真3 斜面歩行の練習場



写真4 斜面歩行練習場の構造



写真5 斜面の横歩きおよびプルークの練習場



写真6 斜面の構造



写真7 転倒防止の施策

2) オンライン方式の授業内容

オンライン方式の授業については、Google社が提供しているオンライン会議ツールであるMeetを利用した。授業の流れは表1の通りであるが、一部対面方式の授業とは異なる方法で展開した。すなわち、授業内における解説（インストラクション）場面にあたる部分は対面方式で受講している学生と同様に、該当事項に関する担当教員の解説を聞きながらメモをとらせた。一方、授業内における運動学習場面（スキーの用具等を使った活動場面）については、その様子を観察するとともに、インストラクション場面で解説された内容を要約し、メモを活用させ、口頭発表するなどの活動を実施した。

3. 調査内容

すべての対象者に対して授業終了後、授業を受けた所感を自由記述形式で記入するよう依頼した。この所感の提出は、本学で導入しているラーニング・マネジメント・システムであるWebClassを利用した。

結果および考察

本授業の成果と課題について検討するために、WebClassを経由して記入してもらった授業の所感がどのような記述内容で構成されているのかをテキストデータ分析ソフト

KH Coderを用いて確認した。

本授業の所感として記入された自由記述に含まれる語とその出現回数を確認したところ、174文が抽出され、その文の中には531語の単語が使用されていた。出現回数については、上位15語を整理し表2に示した。受講者全体でみると「滑る(40回)」「行く(29回)」「履く(29回)」「ブーツ(28回)」「学ぶ(27回)」などの語が出現していた。

次に各抽出語の関連性を確認するために共起ネットワークを作成した。その結果、11個のサブグラフが出現した(図1)。

「体験」「実際」の2語で構成されるサブグラフに関連する自由記述を以下に記す。

表2 本授業に関する所感における抽出語

抽出語	出現回数	出現率
滑る	40	2.35%
行く	29	1.70%
履く	29	1.70%
ブーツ	28	1.65%
学ぶ	27	1.59%
実際	25	1.47%
行う	23	1.35%
授業	22	1.29%
感じる	21	1.23%
初めて	18	1.06%
楽しい	17	1.00%
知る	17	1.00%
実習	16	0.94%
雪	15	0.88%
体験	15	0.88%
歩く	15	0.88%
難しい	13	0.76%
マット	12	0.71%
板	12	0.71%
機会	11	0.65%

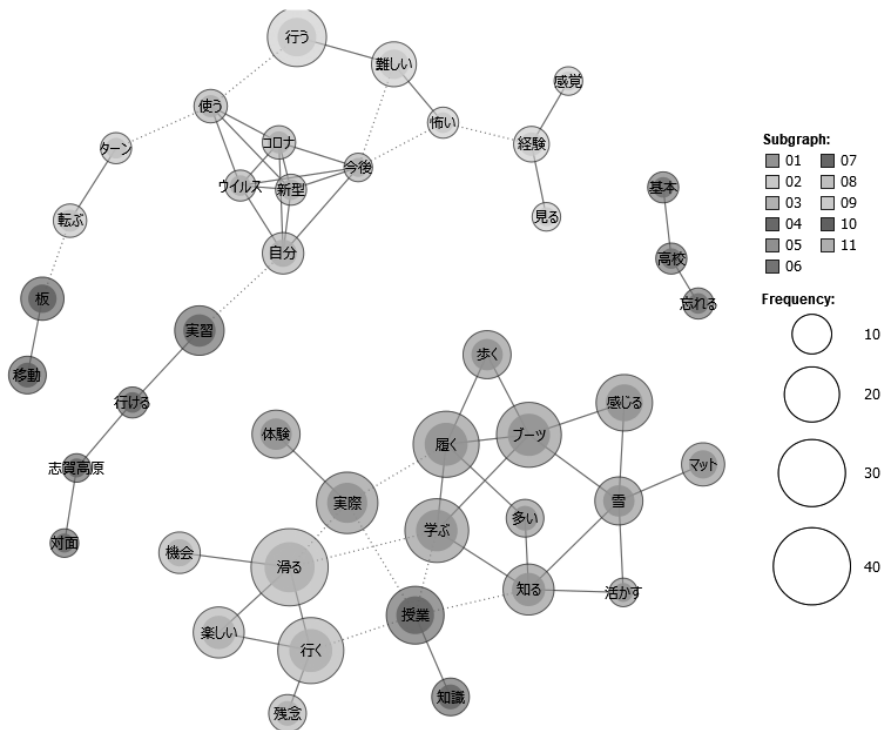


図1 本授業の所感に関する共起ネットワーク

- ・ **実際**にスキーに行くことができなくて残念であったが、似たような**体験**をすることができたのでよかった。
- ・ スキーの一つ一つの動きには雪山で滑る中で必要な動きであり、手袋を着けることやヘルメットを着用するという小さな意識で大きく変わってくるのだなと**体験談**を聞いたり、自分が**実際に体験**してみて感じた。

上記2つの自由記述のように、このサブグラフは「雪上でのスキーの代わりに疑似的な体験をすることができたこと」および「授業内で実際に体験したこと」に関する2つの面で構成されていた。このうち、疑似体験については、「滑る」「行く」「楽しい」などの5つの語句で構成されるサブグラフに関連する自由記述に『**現地に行って雪の上を滑ることが出来なかったのは残念だったけど、マットで作られたゲレンデでスキーをするのは自分の想像以上に楽しむことができました。**』といった記述が認められたことから、受講生は、本授業で用いた簡易的なスキーコースを使った疑似的なスキー体験を楽しんでいたと推察され、授業内容に対する受講生の満足度という観点において、一定の成果が得られている可能性が考えられた。

また、「授業内で実際に体験したこと」については、「ブーツ」「履く」「学ぶ」など10個の語句で構成されるサブグラフに関連もので、以下のような自由記述が確認された。

- ・ スキーの用具や、滑り方など基本的なことを**学ぶ**ことができました。スキーブーツを**履く**ときにハイソックスを**履いた**方がいい理由や、スキーウェアの機能など、今まで知らなかったことを**学ぶ**ことができました。
- ・ スキーをしたことはありましたが、細かいところまでは知らなかったのでとても勉強になることが**多かった**です。私がスキーに行ったときは、一緒に行った人も素人なので、スキーウェアの着用方法や**ブーツの履き方**などは試行錯誤しながら行った記憶があります。滑るときもスキー板を八の字にしてブレーキをかけることはしていましたが、それに名称があることは**知りませんでした**。

さらに、「知識」「授業」の2語で構成されるサブグラフに関連する自由記述には『**今日の授業でいろんな基礎知識を学べたと思います。**』『**スキーの服装や滑り方、細かい知識などを理解することができた。**』『**対面授業を通して基本的知識を学べたので個人的にスキーに行きたいと思いました。**』といった内容が認められた。「転ぶ」「ターン」のサブグラフでは『**装具の付け方や転んだ時の対処法やターンの仕方など多くのことを学びました。**』

「板」「移動」のサブグラフでは『学んだことは、板の位置を把握する大切さである。なぜなら、ターンや移動のときに片方の板でもう片方の板を踏んでしまい、転んでしまいそうになったシーンが多かった』といった記述が認められた。これらのことから、受講生は、ブーツの履き方や歩き方などの基礎的な知識を身に付けることができた可能性があり、本授業実践における大きな成果であったと考えられた。これまでの雪上型スキー実習においては、前述したように社会的スキル（松本ほか，2016；中澤ほか，2014）や社会人基礎力（松尾ほか，2016）といった授業を通じた個人の心理社会的スキルの向上に関する成果は認められている。また、授業内容に関連する成果としてはスキー技能の向上に関する成果（田中ほか，2021；永井ほか，2017；片山ほか，2015）は認められているが、知識の獲得や深化といった成果は見当たらない。つまり、非雪上型でのスキー実習を取り入れることで、雪上型スキー実習以上に受講生における知識の獲得や深化を促すことができる可能性が示唆される。

一方で、「実習」「行ける」「志賀高原」「対面」の4語で構成されるサブグラフに関連する以下の記述から、雪上での実習を楽しみにしていたという受講生の希望を叶えることができなかったという点においては、受講生の満足度を本当の意味で満たすことはできなかったといえる。

- ・今回は本来**実習**が行われるはずだった**志賀高原**に行けなくて**対面**授業（オンライン含む）という形になって、本来の雪の上での実習ではないことから実習という観点からいうと劣るかもしれない。しかし、ある程度の知識は身についたと思います。
- ・今年度最大のビッグイベントだった長野の**志賀高原**でのスキー**実習**に行けなかったことが1番悔しいですが、**対面**授業を通して基本的なことが学べたので個人的に行きたいと思いました。

また、前述したように雪上、さらには宿泊を伴う実習であるからこそ得られる学びや成果があることも否めない。以上のことから、非雪上型スキーの授業のみでの実践は、知識やスキルの獲得という点において、知識の獲得や深化を促す可能性はあるが、授業を通して獲得が期待される汎用的な技能の獲得には限界があり困難である。

しかし、スキーに対する興味・関心という点については、「自分」「今後」「コロナ」など6つの語句で構成されるサブグラフに関連する記述から、本授業で学んだ事項を活用してスキーをしてみたい、雪山で試してみたいというスキーに対する興味・関心を掻き立てることができたことが推測される。

- ・ **新型コロナウイルス**感染拡大の影響で志賀高原には行くこと出来なくなったが、体育館でできること、ブルークボーゲンであったり、キックターンや転んだ時の対処法など、実際にスキー場に行った際に使える技術を教えていただいた。**今後**、スキーに行った際には**使**っていきたい。
- ・ スキーに行ったことがなかったので初めて聞く言葉が多かったが、**今後**、**自分**がスキーに行った際に今日学んだことを**使**ってみたいと思った。
- ・ スキー自体初めての体験で、何も分からない状態でのスタートでしたが、**今後自分**が指導する立場になった時に、必要になる分野になると感じました。あとは、**新型コロナウイルス**が収束したら、実際に雪山で試してみたいと思います。

これは、第2期スポーツ基本計画で掲げられているスポーツ参画人口の拡大に寄与する側面を有しているともいえる。また、2022年度より実施される予定である第3期スポーツ基本計画の中間報告では、スポーツによる地方創生、まちづくりのためのスポーツツーリズムのさらなる推進を意図して、ウィズコロナの中でも三密を避けて楽しむことができる、各地域の自然資源を活用した「アウトドアスポーツツーリズム」について、コンテンツ開発を積極的に推進するとしており、スキー等のアウトドアスポーツを柱の一つとしてスポーツ参画人口の拡大や地域創生に着手しようとしている。本授業実践は、あくまでもスキーの疑似体験を基盤とした実践であるため、従来の雪上型スキー実習と比較すれば、その体験の質は低下することは否定できず、受講生のスキーに対する興味関心を掻き立てるには充分ではない。しかし、実際に雪に触れることができない状況下であっても、スキーに対する興味・関心を引き出したことは大きな成果であり、雪山へ移動することなく生涯を通じた野外活動の推進やそれに伴うスポーツ人口拡大およびスポーツによる地域創生を促す機会を提供する場となりうる可能性が考えられた。

一方で、雪に触れることができない状況下であったからこそ生じた課題も見受けられた。「難しい」「行う」「怖い」の3語から構成されるサブグラフに関連するもので、以下の記述が確認された。

- ・ スキーをしたことがなくてドキドキしてたんですが、今日の授業で**難しい**ことを知りました。雪じゃない段階で**難しい**ということは雪ではもっと難しくなってくるのではないかなと思います。**怖**さも**怖**かったので雪だともっと**怖**くなるなど感じました。
- ・ その中でもキックターンは自分にとっては**難**しく、**怖**くて上手くできませんでし

た。またマットの上から滑る際も上手くは出来ましたが、いざ本番で滑るとなるとまだ不安が大きいです。

- ・マットで作られたゲレンデでスキーをするのは自分の想像以上に楽しむことができました。あのゲレンデで結構怖かったので、現地に行ったらもっと悲惨なことになっていたと思います。

本授業で使用した簡易的なスキーコースにおける滑走路は、スキー場のゲレンデと比較すると大変狭く、短い。さらに雪上とは違い、スキー板と地面との間の摩擦も大きく滑らかな滑走は困難であるため、滑走の難易度はゲレンデと比較して高くなった可能性がある。しかし、一部の受講生は本授業で使用したスキーコースの方が、実際のゲレンデよりも難易度が低いと考えており、スキーの技術習得に対する不安を感じさせる結果となっていた。この不安は、本授業で使用したスキーコースでの滑走と雪上での滑走との違いを説明していなかったために生じたと考えられる。したがって、次回実施する際には、雪上ではスキー板にかかる摩擦や抵抗が少ないため、体操競技・器械運動用のマット等で作成されたスキーコースよりも滑らかな滑走が可能であること、実際のゲレンデは斜面が広く長いから、本授業で使用した簡易的なスキーコースよりも余裕をもった滑走が可能であること等を説明し、技術習得に対する不安を低減させたい。

また、このような事態は雪上での実習を組み合わせることで、学修効果が得られる可能性がある。前述したように雪上での実習であるからこそ得られる学びや成果もあることから、本授業で実施した内容を雪上での実習前の事前学習として位置付けが適切であると考えられる。片山ほか(2015)は、スキー実習の事前研修の意義を検討する中で、事前研修により受講生の実習に対する不安を一定程度取り除くことができたが、これをさらに有効なものにするために実習へのイメージをもっと鮮明につけさせるような事項を取り入れる必要があるとしている。本授業の内容は、簡易的なスキーコースを使用したスキーの疑似体験が可能であることから、実習へのイメージを持つことが可能である。加えて、基礎的な知識の獲得や深化を促す可能性も示唆されたことから、雪上でのスキー実習における学修効果をさらに高めるために有効だと考えられる。さらに、本授業のような形式で事前研修を実施することで、宿泊を伴う雪上での実習期間を短縮することも可能である。新型コロナウイルス感染拡大の影響が今後どの程度継続されるのか不透明である現状や、そのほかの有事により実習期間の短縮等を検討する必要性が生じた場合を勘案すると、部分的に本授業のような形式での授業実施を選択肢として含めておくことは改新案であり、教育の現場においてどのように活用できるか検討する必要がある。

本授業実践の検討は、受講生が提出した所感に基づく定性的な検討であり、定量データでの検討は実施できていないため、十分に汎用性があるとは言い難い。また、従来の雪上型スキー実習との比較検討も実施できていない。今後は、雪上型スキー実習との比較を通して、各々の成果や学びの違い等を検討し、スキー実習の学修効果をさらに高めていきたい。

文 献

- 新井健之・青木通・伊藤巨志・木村博人・栗原祐二・大橋信行・北原澄高・三好英次
(2010) 高等教育機関におけるスキー・スノーボード実習の実態調査報告1：平成20年度
のスキー・スノーボード実習の実施状況. 日本体育学会大会予稿集, 61, 245.
- 片山昭義・中島悠介 (2015) 福祉系大学におけるスキー実習の学習成果に関する一考察
－事前講習の意義と実習本番に与える影響について－. 浦和論叢, 53, 69-84.
- スポーツ庁 (2021) 第3期スポーツ基本計画 中間報告 (令和3年12月20日)
https://www.mext.go.jp/sports/content/20211220-spt_sseisaku01-000019607_01.pdf
(2022年3月4日閲覧)
- 田中淳・高見彰 (2021) 本学スキー実習における学生の取り組みと学修成果および満足度
に関する報告. 国際研究論叢：大阪国際大学紀要, 34, 127-135.
- 永井将史・東山昌央・大石示朗・本田宗洋 (2017) 本学スキー実習の取り組みと学習成果
に関する報告. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 52, 119-126.
- 中澤史・麓正樹・谷木龍男・山崎将幸 (2014) スキー実習による受講生の社会的スキル向
上効果. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 32, 9-13.
- 松尾美香・西村次郎・山崎めぐみ・望月雅光 (2016) 大学における自然体験学習のねらい
とその教育効果に関する研究－スキー実習を対象にして－. 岡山理科大学紀要, 52B,
49-59.
- 松本裕史・中西匠・西田順一・柳敏晴 (2016) バディシステムを用いたスキー実習が女子
大学生の社会的スキルに及ぼす影響：問題解決因子およびコミュニケーション因子の変
化に着目して. 健康運動科学, 6 (1), 23-29.
- 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画.
https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf (2022年3月4日閲覧)